

ふ ちゅう い せき 府中遺跡現地公開資料

平成 29 年 6 月 3 日（土曜日）
大阪府教育庁文化財保護課

■はじめに

和泉市に所在する府中遺跡は、東から延びる丘陵と海岸に沿う平坦地の間に位置し、遺跡の南には榎尾川が西流します。遺跡の範囲は、和泉国府跡や和泉寺跡などの推定地を含んで東西 1.0km、南北 1.2km と広く、弥生時代から古墳時代ごろの集落跡を中心とする遺跡と考えられています。

大阪府教育庁文化財保護課は、都市計画道路大阪岸和田南海線の建設に伴って、平成 17 年度から府中遺跡に関わる埋蔵文化財調査を実施しています。その成果として、弥生時代（約 2000 年前）以降、中世（約 500 年前）に至る各時代の遺構・遺物がみつかっています。中でも注目されるのは、弥生時代終わりごろ（約 1800 年前）の大量の土器（写真 1）が出土したことや、和泉国や和泉寺跡に関係すると思われる、古代氏族の人名が書かれた奈良時代（約 1200 年前）の文字瓦など（写真 2）が多数出土したことです。

今回の調査地は、府中遺跡の東端にあたるところで実施しています。おもな遺構の時期は 2 つあり、古い順に、①弥生時代中期（約 2000 年前）と②弥生時代の終わりごろ～古墳時代前期（約 1800～1600 年前）に区分できます。遺物としては、この 2 時期の土器などのほか、縄文時代の石鏃（石で作られた矢じり）や、古墳時代の須恵器などが出土しています。



図 1 府中遺跡の位置と周辺の遺跡



写真 1 流路から出土した大量の土器（平成 20 年度調査）
（弥生時代終わりごろ／約 1800 年前）



写真 2 「坂合部連前」と記された文字瓦（平成 21 年度調査）
（奈良時代／約 1300 年前）

■おもな遺構と遺物

①弥生時代中期（約 2000 年前）の遺構： 竪穴建物 65 があります。平面形は直径約 6.2m の円形で、床面積は約 30 m²です。建物の周囲には溝を巡らせ、建物の中心には炭と灰で埋まる穴がありました。煮炊きをするための炉の跡と考えられます。また、床面には土器や磨石が残り残されていました。なお、建物の中に土坑（穴）はありますが、柱の痕跡は明確でないため、屋根を支えた柱は抜き取られ、リサイクルされたものと考えられます。

②弥生時代終末期～古墳時代前期（約 1800～1600 年前）の遺構： 竪穴建物 10・85、土坑 6・60 などがあります。このうち四角形の竪穴建物 10 は、一辺が約 3 m で、床面積は約 9 m²と小形です。建物の中心には炉があり、地面が赤く焼けていました。建物の周囲には溝が巡ります。建物から時期を示す土器などは出土していませんが、すぐ近くの土坑 6・60 から約 1800 年前の土器が出土していることから、建物も同じ時期の遺構なのでは、と考えています。

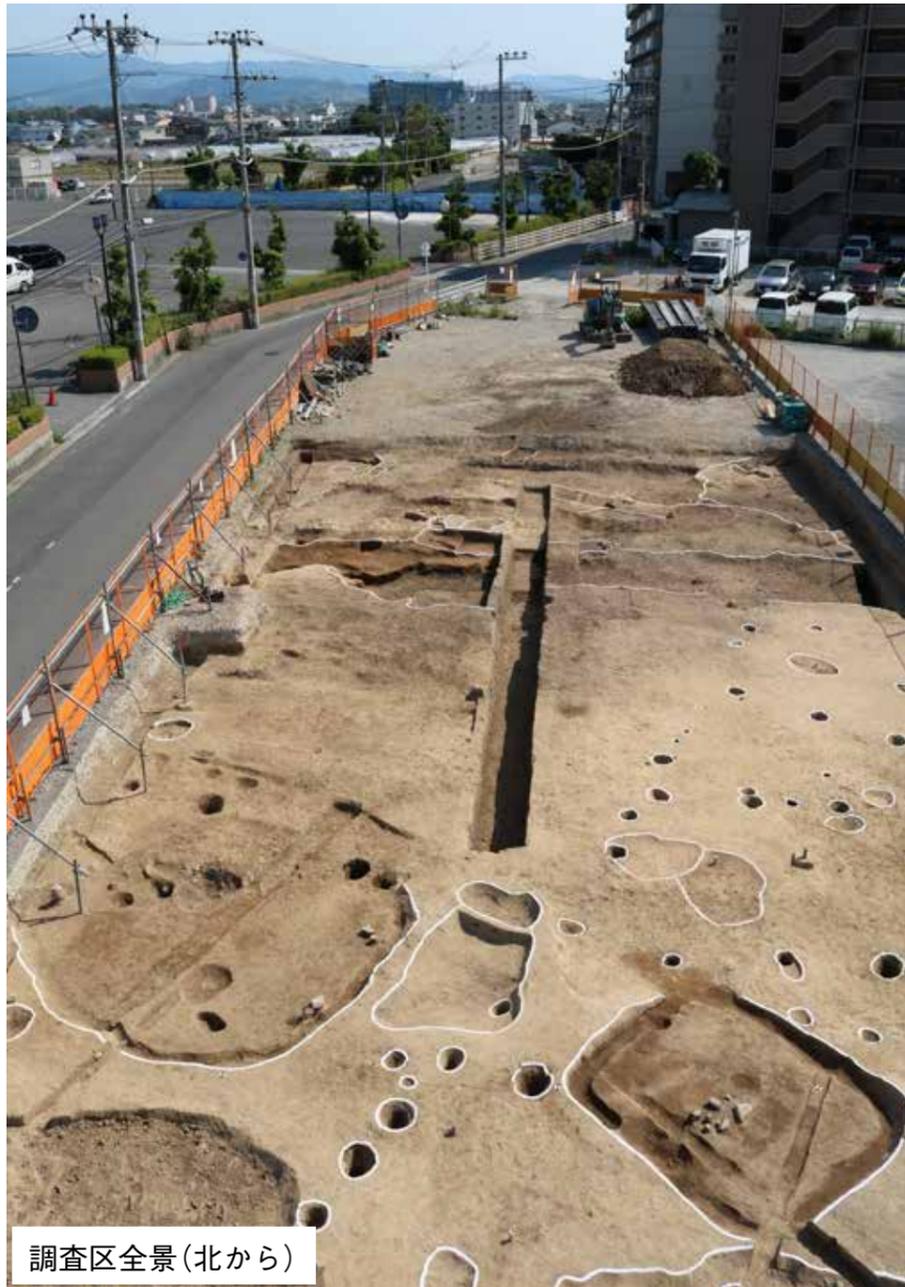
竪穴建物 85 は、調査区の南東隅で検出したため全体の形がわかりませんが、一辺 6 m ほどの四角形になりそうです。やはり周囲には溝を巡らせています。

そのほかに、時期を特定できていませんが、掘立柱建物 2 棟と、土坑 100、溝 70 などがあります。掘立柱建物には 2 間×1 間、3 間×1 間の 2 棟がありますが、柱の間隔が不自然に空く部分があることから、本来存在した柱穴が失われてしまったのかもしれない。

土坑 100 は、溝 70 によって壊され全体の形がわかりませんが、竪穴建物である可能性があります。溝 70 は東西方向に流れ、幅は約 3 m、深さは最大で 80 cm ほどです。溝が掘られた時期はよくわかりませんが、約 1400 年前の土器類が出土することから、この頃に埋まったことがわかります。

■まとめ

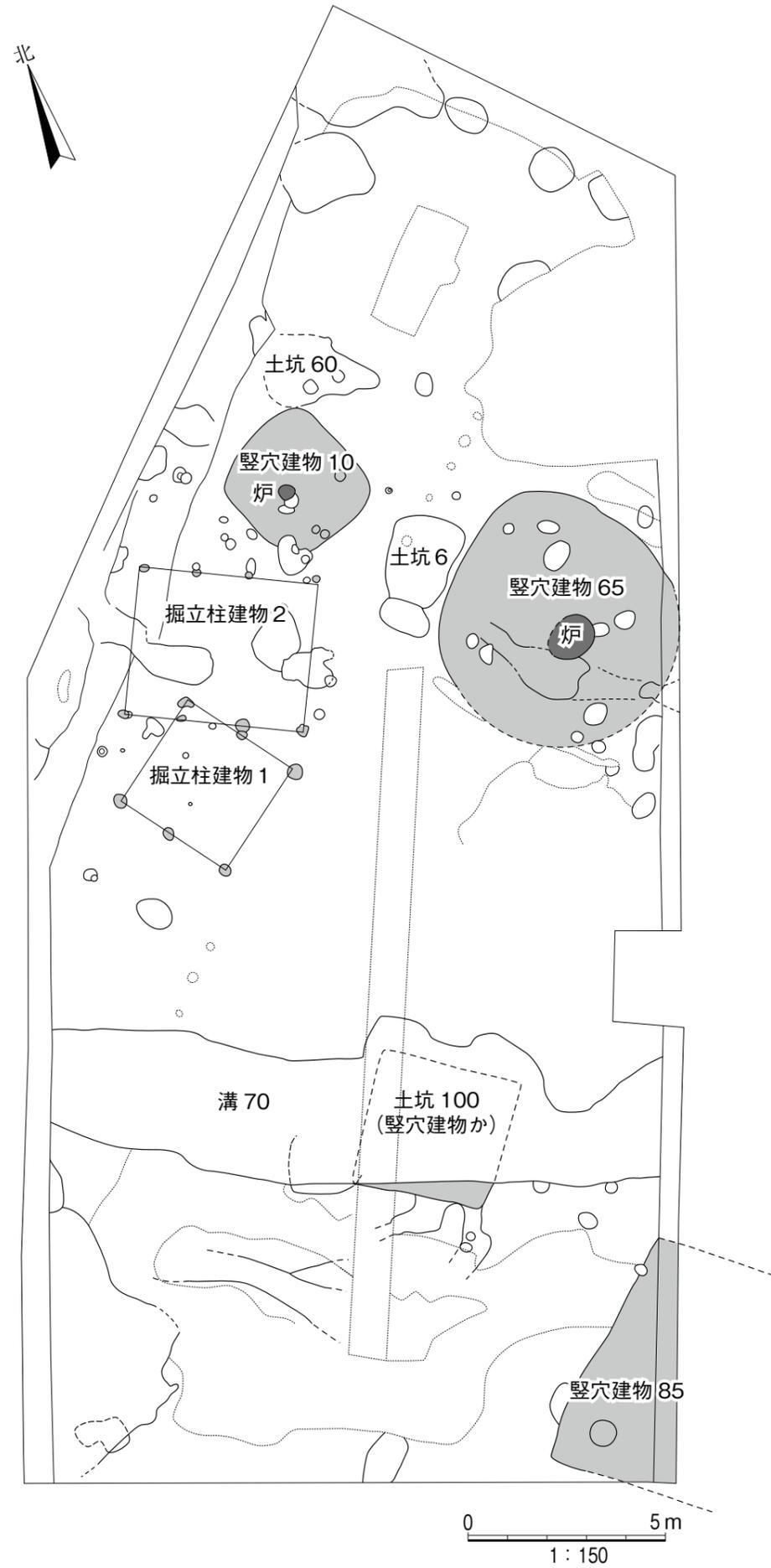
今回の調査によって、調査地一帯では約 2000 年前から集落が営まれ、その後、断絶はありますが 1400 年前ごろまで人びとの生活の場となっていることがわかりました。地域の歴史を明らかにするうえで、地上からはわからないこうした知見を発掘調査によって得ることができたことは、貴重な成果といえるでしょう。



調査区全景(北から)



竪穴建物 10(南から)



竪穴建物 65(南から)



竪穴建物 65 内の炉



土坑 6 の土器群(東から)